

小林平大の

がん治療の進化を日撃せよ!



第27回

がんの原因はカビ? 『ネイチャー』掲載論文で大注目の治療率九六%を誇る「重曹点滴療法」

二〇一九年十月二日、世界的権威のある科学誌『ネイチャー』に掲載された論文で膵臓がんの発生に真菌(カビ)が関与している可能性が報じられました。論文では、腸管腔から膵臓に移動した真菌が膵臓がんの一つである膵管腺がんの発症に関係していることが示唆されると結論づけられています。

つまり、腸内の真菌が膵管に移動して膵臓がんを発症させている可能性が示されたわけですが、ヒトおよびマウスモデルにおける膵管腺がんでは、正常な膵臓組織と比較して約三〇〇〇倍も

「重曹点滴療法」とは? 治療率九六%の衝撃!

の真菌の増加が示されました。

この論文で膵臓がんの発症と関係が深い真菌として示されたのは、ヒトの不調の原因としてよく知られるカンジダ属やアスペルギルス属ではなく、「マラセチア属」と呼ばれる種類でした。膵臓がんの発症に関して、マラセチア属と「MBL(マンノース結合レクチン)」という自然免疫系が関与していることが示唆されるとしています。

MBLは進化の過程で生まれた生体防御機構で、獲得免疫系のT細胞やB細胞よりも古い存在です。MBLは体内に侵入した微生物を食細胞などに貪食させる目印を付ける働きをします。真菌では、カンジダ属やクリプトコッカス属、アスペルギルス属をよく補足することが知られています。マラセチア属との関係はあまり知られていません

でした。

今回の研究では、これまで知られていなかった真菌と自然免疫系との関連によって膵臓がんという難治性腫瘍の形成が促進される事実が判明しました。『ネイチャー』の論文では膵臓がんに限定してはいますが、がんは「転移」の特質を持ち、膵臓だけが真菌関与でほかの臓器や部位がまったく違う原因とは考えにくく、おそろしく、膵臓がんの研究が主であり、論文として出せるほどのほかのがんのデータはまだ少ないのでしようが、そちらも大いに期待したいところです。

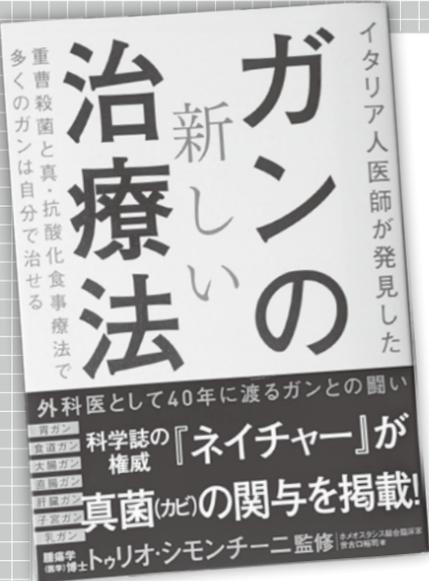
実際、この事実の発見は世界のがん治療を新たなステージへと導く可能性を秘めているのです。というのは、実はがんの発症理由として「真菌原因説」を唱え、高い治療率を誇る「重曹

として四十年以上にわたってがん治療にあたる中で、多くのがんを重曹点滴療法によって治療できることを発見しました。驚くべきなのはその治療率です。なんと約九六%という驚異的な治療率を達成したのです。重曹点滴療法の開発は、シモンチーニ博士の「がんは何かの感染症ではないか」という着想から始まりました。さまざまな治療法を試した結果、最終的に重曹点滴療法にたどりつき、驚異的な治療率を上げる中で「がんは真菌が原因で発生するのではないか」と考えたのです。そして、抗真菌剤である重曹がこれほど高い治療率を出せる事実と腫瘍部位に非常に高い確率で真菌が見つかることから、がんの原因は真菌であるという考え

に確信を持つに至ったそうです。ただ、がんそのものが真菌というわけではありません。重度のストレスや免疫力低下、低体温、低酸素などの状態から体内の真菌による感染症を発生した結果、これを発端とした生体防御との兼ね合いでがんが拡大していくと考えたのです。重曹は、塩化ナトリウムを電気分解して得られた水酸化ナトリウムに二酸化炭素を加えて作られ、強いアルカリ性を示します。実は、真菌は塩に弱い性質があるのですが、アルカリ性にもたいへん弱いのです。真菌は自身の構造を変化させて抗真菌薬剤などに対して耐性を持つことができますが、重曹の殺菌力は非常に高いうえに強いアルカリ性であるため、真菌

腫瘍まで届けることが難しく、簡単にはいきませんでした。治療に時間がかかる場合もあり、がんの進行に間に合わなかった症例も多かったようです。しかし、この頃にはシモンチーニ博士の重曹点滴療法の効果を知り、多くの協力者や賛同者たちが集ってアイデアを出し合い、難治性の腫瘍や部位を一つひとつ克服する方法を開発していきました。例えば、「カテーテルを入れて人体深部の病巣に重曹を直接送り込む方法」「動脈に造影剤を入れてX線で視覚化しながら腫瘍に栄養を送る動脈を特定し、そこに細かいカテーテルを入れて重曹を送り込む方法」「脳腫瘍に対して頸動脈からの『選択的動脈造影』という手段によって重曹を届ける方法」などです。最終的にほぼすべてのがんに対して効果を上げることができ、治療率約九六%を達成したのです。しかも、重曹点滴療法は副作用がほとんどなく、少数の人で一時的な疲労やのどの渇きを覚える程度だということです。

実際、重曹点滴療法は古くから日本でもがん治療に行われた治療法なのです。当研究会・相談役で初代厚生労働大臣を務めた坂口力先生によれば、昔は多くの医師が重曹点滴療法によるがん治療を行っていたとのこと。また、昭和三十年代に大阪大学医学部で悪性腫瘍の入院患者三五名に対して重曹点滴療法が行われており、ほぼすべての患者に対して良好な結果を残し、特にその中の二〇名に対しては著効だったという論文が残っています。また、論文の中で当時の大阪大学医学部教授が「併用療法としてすべてのがん患者に対して行うべき治療法である」との結論を述べています。異なる時代と場所、重曹点滴療法ががん治療に対して行われ、ともに著効を記録していたことは非常に興味深いことです。『ネイチャー』という世界的権威のある科学誌に掲載され、日本でベストセラー書籍となったことをきっかけに、日本でもこの古くて新しいがん治療法がきちんと検証され、ほんとうに高い効果が望めるならば、広く普及していくことを願っています。



『がんの新しい治療法』世古口裕司著、トウリオ・シモンチーニ監修(現代書林)

の耐性を獲得するスピードが重曹の殺菌力に追いつかないのです。ただし、すべてのがんを重曹点滴療法で治療できるかという点、部位によって重曹を

実際、重曹点滴療法は古くから

実際、重曹点滴療法は古くから